

## 最上地区の県立高校再編整備に係る地域説明会記録要旨 【最上町会場】

- 1 日 時 令和元年10月31日(木) 19:00~20:20
- 2 場 所 最上町立中央公民館
- 3 出席者 地域の方々107名  
県教委 須貝教育次長、生島高校改革推進室長、外 事務局職員3名
- 4 内 容 生島室長から説明後、質疑応答
- 5 質疑応答概要

### (質問・意見)

- 最上地区から昼間定時制高校へ進学するには、遠距離通学となる地区外の霞城学園高校や酒田西高校に通学しなければならない現状である。昼間定時制高校設置には、独立校舎の確保が必要であるという説明があったが、この地区にも早期の設置をお願いしたい。

### (県教委)

- 昼間定時制と全日制が校舎共用となれば様々な制限が生じてくるため、独立校舎への設置が必要と考えている。早期の設置に向け、様々な検討をしてきたい。

### (質問・意見)

- 新庄北高校最上校(以下、「最上校」という)を是非存続してほしい。最上校の生徒は、福祉や地域の行事などへ積極的に参加しているだけでなく、小規模校ならではの教育活動を実践しており、中学時代に不登校であった生徒ものびのびと学校生活を送っている。また、最上校の生徒のため、町はセミナーハウスを準備し、子ども達の成長を手助けする場となっている。最上校は町にとってなくてはならない高校であり、様々な問題を抱えた生徒には、小規模校における教育が必要ではないか。

### (県教委)

- 最上校の特色ある取組みのために、町からは様々な支援をいただいております。最上校では小規模校ならではの教育活動が実践されており、大人数の高校にはなじめない生徒の選択肢にもなっていると認識している。募集停止のルールの見直しを含め、小規模校の在り方について改めて検討する必要があると考えている。

### (質問・意見)

- 7年間最上校セミナーハウスの舎監として、生徒と共に生活し、町の行事にも一緒に参加している。最上校には、中学校時にいじめ、不登校、ひきこもりなどを経験した生徒など様々な課題を抱えた生徒も入学してくるが、自然が豊かな環境の中、地域と繋がりながら小規模校ならではのカリキュラム等により立派に成長し卒業していく。今後ますます多様な生徒の増加が予想される中、大規模校のみとなり、高校の選択肢がなくなってしまうのは、非常に悲しいことである。最上校は、ボランティア活動などの地域活動を重視しており、最上町の良さをアピールしつつ生徒達も成長する活動となっている。

(県教委)

- 最上校は、地域の方々から支えられており、地域に育てられている学校である。生徒は校内活動だけでなく、校外での活動においても大きく成長する。小規模校の魅力化を図るためには、地域と連携しながら、地域の力をお借りすることが必要と考えている。

(質問・意見)

- 最上地区の高校を中心部に集めてしまえば、子ども達が地元に残らず町は寂れてしまう。小規模校を存続し、全ての生徒に平等に教育を受ける機会を提供することが必要ではないか。

(県教委)

- これまでも小規模校を大切にしており、小規模校の教育環境を可能な範囲で維持するためにキャンパス制を導入するなどしてきた。募集停止のルールの見直しを含め、小規模校の在り方について改めて検討する必要があると考えている。

(質問・意見)

- 今後も、発達障がいをもった子どもの増加が想定されるが、特別な支援を要する生徒が入学できる高校の整備についてどのように考えているのか。

(県教委)

- 特別な支援を要する生徒は、どの高校にも在籍している現状である。特定の高校だけが特別支援教育を担っているわけではなく、あらゆる高校でそのような生徒を支援していく必要がある。最上校は特別支援教育に力を入れ実績を上げており、他の学校に取り組みを紹介するなどして教員のスキルアップを図っている。知的障がいの生徒は、高校における授業理解が困難であるため、通常は特別支援学校の高等部に進学する。それに対し、高校教育に対応することができる発達障がいの生徒は高校入選を受検し、基準に達し合格すれば高校に進学できる。全ての学校でそれぞれの生徒のニーズに応じたきめ細やかな教育をしていかなければならない。

(質問・意見)

- 最上地区の3分校は、「学校の統廃合等に関する基本方針」により、令和2年度も入学者数が20名未満の場合、原則として2年後に募集停止となってしまう。再編により小規模校がなくなれば、生徒の選択肢が限られてしまい、生徒の多様なニーズに応えられないのではないか。今までの再編基準を適用するのではなく、人口の減少に合わせた新たな定員、適正な学校規模を考えて欲しい。

(県教委)

- 本県では、1学年4～8学級を適正な学校規模としているが、これまで小規模校も大事にしてきた。公立高校に配置される教員数は、収容定員に応じて定められている。少人数学級編制にして入学定員を減らした場合、配置される教員数がむしろ減ってしまい、教育課程の編成が困難となるために40人学級としている。

(質問・意見)

- 最上校の募集停止には反対する。生徒の減少により高校を統合することにメリットがない。時間をかけて議論して欲しい。

(県教委)

- 地域に皆様の考えを丁寧にお聞きし、今後の検討に生かしたい。

(質問・意見)

- ① 中学校卒業生数が減少するため、学級数が削減となるのは仕方ない。島根県では、しまね留学として年 200 名の県外生徒が県立高校に入学している。山形県は、県外募集についてどのような取り組みを行っているのか。
- ② 多様な生徒に対して学びの場を提供のため、通信制高校の充実や広域通信制高校の活用についてどのように考えているのか。

(県教委)

- ① 本県では、加茂水産高校、遊佐高校の 2 校で県外募集を行っている。直近 5 年間における最終倍率の平均値が 1 倍に満たない学科がある高校のうち、県内唯一の学科が設置されている学校、または 1 学級規模の学校で地域との連携が確立している学校が導入対象校となる。まず、学校や地域の実態を考えて所在する自治体と相談の上、校長から県教委に申請し、審査され承認された場合に県外募集が認められる。県外から生徒を募集するには、学校の教育内容などの魅力だけでなく、学校以外における生活面での安心が不可欠であり、地元自治体からのサポート、バックアップが不可欠と考えている。
- ② 現在、全国の高校生の 5% が通信制に在籍しており、20 人に 1 人が通っている計算になる。多様な入学動機や学習歴をもつ生徒の選択肢となっており、日中の時間を趣味や創作活動、スポーツに有効活用したい生徒が積極的に進学する生徒が増加している。令和 4 年度に庄内総合高校に、通信制の設置を計画している。現在設置されている霞城学園高校や鶴岡南高校よりは距離的に近くなり、今よりも通いやすくなると思われる。

(質問・意見)

- ① 最上町は令和 4 年の冬季インターハイのスキー競技を召致しているが、その進捗状況を聞きたい。
- ② 最上校の特色の一つにスキー部があり、オリンピック選手も輩出している。スキーによる高校の魅力づくりはできないか。

(県教委)

- ① 最上町からは、冬季インターハイのスキー競技の召致の要望をいただいている。他の候補地と比較検討し、山形県高校体育連盟において県内での開催候補地を選定した後、全国高校体育連盟から正式な要請がくるものと考えている。
- ② 本県はスキー競技が強い県であるが、競技スキー人口が減少している。競技力強化について要望があったことは、担当課に伝えたい。

(質問・意見)

- ① 令和7年の新庄市内の高校再編では、基本的に普通科、農業科、工業科、商業科の設置を考えているようだが、特色ある魅力ある高校とするため、体育科などの新たな学科の設置は考えないのか。

(県教委)

- 魅力ある高校となるよう高校再編を進めていきたい。普通科は中学生の志望が高いが、農業科、工業科、商業科は、地域産業の担い手という点で重要な学科と認識している。そのため、再編後も、現在ある普通科、農業科、工業科、商業科の設置が基本となると考えている。本県にない学科の設置の要望もいただくこともあるが、中学校3年生の段階で将来の職業を明確にしている生徒は少ないため、将来の職業に直結する専門に特化した学科に、毎年40名の入学者を確保することは難しい。また、高校卒業後の出口が保証できるかも考慮しなければならない。普通科は、多様な進路希望に応えることが可能であり、中学生にとって選択しやすい学科である。専門性を特化し過ぎると、その専門分野以外を進路希望としている生徒からは選択肢から外れてしまい、中学生のニーズと合致しなくなる。

(質問・意見)

- ① 少子化により学校の活力・教育機能の低下が危惧されるため再編整備が必要であることは理解できる。即座に再編整備をするのではなく、設置自治体や地元の住民と共に3年間程度検討するなどの方策が考えられるのではないのか。
- ② 再編整備計画の策定に向けて教育庁内で検討するのではなく、様々な議論の場を設けて欲しい。

(県教委)

- ① 少子化の中、どのような魅力的な高校をつくっていくかは難しい問題であるため、地域の方々からいただいた様々なご意見を参考にして検討したいと考えている。
- ② 地域説明会などの意見を参考にしながら、教育庁内で検討を進めたい。また、令和2年3月の再編整備骨子案公表後も、様々な場面で意見を伺う予定としている。

以上